

東日本大震災後の地域活力向上への取り組み

岩手県大槌町 安渡町内会 会長 佐々木慶一

1. はじめに

東日本大震災で多くの住民の命をなくした安渡地区では、二度と繰り返さないという強い意識の下で日本初となる地区防災計画を策定し、毎年命を守るための訓練を実施している。一方で震災後の地域外への住民流出により、安渡地域住民数が激減したことから、地域コミュニティの再構築が地域の大きな課題となっている。安渡町内会では地域の公民館を活用し様々な住民交流の場を創出することで、地域防災力の強化とともに生きる喜びを見いだせる地域づくりを目指して取り組んでいる。

2. 東日本大震災による安渡町内会の変遷

安渡地区は、東日本大震災前には一丁目町内会、二丁目町内会、三丁目町内会の3つの町内会があり、800世帯・2000人の住民が生活していた。しかし震災により多くの家屋が被災し、居住できる平地が少ない安渡地区では、復興事業が完了するまでこの地で生活することができなくなった。そこで平成23年12月に全ての町内会を解散し、平成24年4月に3つの町内会が合併して新たに「安渡町内会」を設立した。



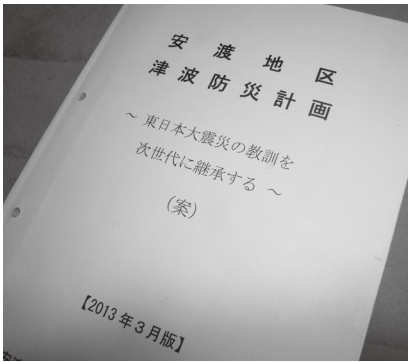
防災計画の見直し着手



3. 震災後の活動

(1) 日本初となる地区防災計画の作成

震災前の安渡地区は大槌町内でも独自の避難訓練を行う等、防災意識の高い地区だと言われていたが、東日本大震災では住民の1割以上の218人も犠牲者が出た。なぜこれほどの犠牲者が出たのかという思いの下、亡くなった住民がその時に取った行動の調査・今後の対応策等について徹底的に議論し検証した。議論のメンバーは、多くの団員の犠牲者を出したばかりか妻と長男・義母も亡くして独り身となった消防団長や、多くの友人・知人を亡くした人など心に傷を負った人がほとんどであったため、検証作業は心の傷をえぐ



日本初となる地区防災計画策定

るような「試練」を要するものであったが、二度と犠牲者を出さないために後世に伝えなければならぬという「使命」の下で、1回当たり4時間の議論を計8回重ねて平成25年10月に日本初となる地区防災計画を策定した。

(2) 地区防災計画に基づく地震津波避難訓練
地区防災計画は作って終わりではなく、計画に基づく避難訓練を毎年実施している。訓練のための訓練ではなく、最も重視しているのは「命をなくさないこと」という視点で現実的な訓練を心がけるといふ点である。具体的には、

① 震災前の避難訓練は「決まった時間になったら決まった場所に避難するだけの訓練」であったが、震災当日は津波警報が出ても自宅で家族の安否を確認したり、地震で散らかった家の中を片づけたりとすぐに避難した人は少なかったため、多くの犠牲者を出してしまった。そこで、地震発生直後に自分だったらどのような行動を取るかを紙に書いてみてから避難を開始するという訓練を行った。このことは、地震発生時に取るべき行動を事前に考えて心の準備をしておくことと、さらには実際にそのような行動を取って時間を費



組立式リアカーによる避難弱者搬送訓練



地震発生直後にやるべきことを書く訓練

やすことは自分の命を危険にさらすことになるため、何を差し置いてもち早く避難しなければならぬということに気が付いてもらうための訓練でもある。

②また、避難弱者の救護手段として折りたたみリアカーの有効性の検証訓練や、アーカイブ活動として震災時に人が亡くなった時の状況を訓練で再現して参加者の意識の風化を防ぐとともに、その時の訓練の様子を映像として残すという取り組み等も行っている。なお折りたたみリアカーは安渡町内会で所有し、「有事の際の避難に不安があるため活用したい」と思う希望者には無償で貸し出す仕組みを作っている。

③特に力を入れたのは、「助けようとする人の命をどうやって救うか」という点だ。東日本大震災では、民生委員や消防団員、地域の自主防災組織員等が、避難弱者を助けようとして自らの命を落としてしまった事例が数多く見られた。このような犠牲者を出さないためには、自分の避難時間を確保するために助けるための時間制約を設けたり、助けられる人も自助努力により可能な避難方法を考えておいたりする必要がある。具体的には、自分や家族の力でせめて玄関先までは

出てきてもらい、周りで率先避難している人に助けを求めるといった行動を取ることで、家の中に入り込んで救助活動を行うことで犠牲になってしまおうということとを避けるという取り組みの周知・訓練実施を行っている。(15分ルール)

(3)震災復興後の地域コミュニティの再構築
震災前には800世帯2000人いた安渡地区住民は、震災により亡くなった人や復興事業遅れに伴う地区外への住民流出等で、現在は200世帯600人にまで減少してしまった。地震津波発生時等、



新春交流会会場



新春交流会舞台発表

有事の際に命を守る取り組みは必要だが、一方で互いの共助意識醸成のためにも日常生活における住民同士のコミュニティも重要となってくる。安渡地区は昔からご近所付き合いは盛んで、心の満足度は高い地域であった。しかし人口減少に伴い、隣近所の交流は激減して地域全体活気がなくなってしまう。震災により人命や財産をなくしてしまった。震災により人々としてのコミュニティをベースとした「生きる喜び」までなくしてしまうのは耐え難いとの思いから、安渡町内会では様々な事業企画を行って地域住民が集い交流



夜桜の舞



花見会

の機会を創出することに力を入れている。

震災後に新たに建設し、平成29年に供用開始した地元の安渡公民館は、行政による管理であったこともあり住民から「使いにくい」という声が多く聞かれ、利用率が非常に低かった。そこで令和4年に大槌町からの依頼を受けて、この安渡公民館の管理を安渡町内会が指定管理者として行うこととなった。その結果、町内会としても公民館をベースとした活動がしやすくなり、以下のような取り組みを行うことで地域住民の利用人数が増大し、交流の機会を増やすことにつながった。

①1月の新春交流会…震災後、長い時間が経過してやっと住宅再建が完了した。しかしながら、住民同士の交流機会が減少したことから、新年の祝賀の場を設けることで住民が集い、約200人の地域住民が郷土芸能を始めとする各種舞台演目を見ながら郷土料理を食し、会話に花を咲かせる機会を再開することができた。

②4月の花見会…現在公民館がある場所は震災前には小学校であり、そのグラウンド周囲には13本もの巨木があった。毎年どの木も満開の花をまとい、地域住民の心を和ませてくれていたが、震災復興の道路事業計画で全ての木を伐採すること



幅広い年代層参加による綱引き

なった。しかしながら住民の強い要望により、道路事業にほとんど影響しない1本だけを残すこととなった。公民館前に1本だけ残った樹齢90年以上とも言われる桜の木は地域住民が手入れを行い、開花時期に合わせて地元高校生の手伝いもいただきながら花見会を開催した。また、夜にはライトアップした桜を背景に「夜桜の舞」を開催し、地域の人たちにも楽しんでいただいていた。

③地区運動会…震災前は毎年10月に開催されていた地区対抗の運動会は、震災を機に12年間実施されなかった。震災前



運動会参加者

のような賑わいの場がほしいという多くの地域住民の声があったことから、令和4年10月に12年ぶりに再開して久しぶりに安渡の青空に笑い声が飛び交った。運動会には地域住民はもとより、地元高校生、内陸から大学生、地元の水産工場で働いている海外からの技能実習生と、幼稚園児から高齢者まで多くの参加者のもとで地区運動会を開催することができた。昨年も3年連続で開催することができ、徐々に定例イベントになりつつある。

その他年間を通じて多数のイベントを行っていきながら、震災前と大きく違う点がある。震災前はこれらのイベントは安渡地域住民だけで実施できたが、現在は役員も少なくなっただけ外部の人たちの参加・協力の

下で実施しているという点だ。震災後に地域復興過程で様々な人が携わった関係でそのような人たちがイベントに加わるようになったり、最近では地元高校生が地域活性化の意識のもとで積極的に協力してくれるようになったりしている。このことは安渡町内会としても歓迎すべきことであるし、このような地域外の人たちとの関係は、将来にわたり継続していきたいと考えている。

4. 今後の取り組み

前段の防災取り組みと後段の地域コミュニティ構築の取り組みはそれぞれ別の取り組みではなく、互いに関連するものと考えている。有事の際、特に避難弱者にとって最も重要かつ効果的な防災対策は近隣住民の援護、つまり地域コミュニティの上になり立つ対策であるという一面が大きい。また各種防災活動に取り組むこと自体が、地域コミュニティの活性化にも寄与すると考える。「どちらか一方」ではなく、互いに大きく影響しあうことであるため、「防災と地域交流を両輪」として、今後も地域の安全向上・活力向上に努めていきたい。



各種行事へ地元高校生参加協力